
フィニアス

なおこ Naoko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フィニアス

【Nコード】

N5426Z

【作者名】

なおこ Naoko

【あらすじ】

二人は別れ、お互いに別の人と結婚し、子供が生まれ、時を経て再び会う。忘れたはずだったのに、フィニアスの中に、彼女への思いが募っていく。そして、十六歳の乙女の青年への恋。青年の心の葛藤。自信家だったフィニアスの心も揺れ動く。忘れられないその面影。それは、別れた後も、消えることのなかった残像なのだ。

笑顔

「フィニアス！」

森の中に響く声。

フィニアスは、ゆっくりと、弧を描くように振り向く。

木々の間から降り注ぐ光、

淡く優しい色の空気、

下草の緑、倒れた大木を覆っているコケ、柔らかな茶色の土で覆われた地面。

その声の主は、うねりながら続く獣道に立っていた。

風が木々の枝を揺らし、光の塊が辺りを照らす。

彼は目を細める。

「父さま！」

小さな女の子の声がした。

フィニアスは、駆けてきたその子を抱き上げる。

自分と同じ黒髪の巻き毛、五歳のニノン。

「フィニアス、あなたに会えないのかと心配していたのよ」

その女性は、笑顔で近付いて来た。

やはりそうだ。

変わらない笑顔。

彼女を何と呼ぼうか。

「フロース・・・そう呼んでもいいのかな？」

彼の戸惑いに、彼女は悪戯っぽい表情をした。

「いいわよ。」

みんなもそう呼んでいるし」

彼女は別の名で呼ばれるようになり、長い間、音信不通だった。

そして、久しぶりに生家へ戻ったのだ。

突然、茂みが揺れ、十六歳くらいの少女が飛び出した。

そして、知らない男性が立っているのを見て驚く。

娘の目は、緑がかった銀色。

なんて美しい色だ。

フロースは、少女の髪についた木の葉を払い、服装を整え、フィニアスの方へ向ける。

「娘のノイよ」

フィニアスはニノンを降ろし、ノイの手を取る。
そしてキスをした。

「わたしは、プリオベール男爵フィニアスだ」

ノイはこの突然の挨拶に驚き、顔を赤らめながら挨拶する。

フィニアスは五十歳を過ぎている。
それなのに、

少年のような屈託の無い笑顔と、洗練された品格で、
少女の心を捉えてしまったらしい。

フロースは、女性の心をつかむのが上手いのは相変わらずだと思
った。

はにかむ娘に、自分が若かった頃を思い出し、ふっと笑う。
彼に恋をし、失恋していた。

ところがニノンは、ノイを取られると思ったらしく、父親に真剣
な顔を向ける。

「ノイはわたしのお姉さんよ」

フィニアスは方膝を付き、ニノンと同じ高さになって微笑む。
「それは良かった。」

だが、ニノンは、父さまが好きだったんじゃないのかな。

会つのも久しぶりなのに」

ニノン は、につこりすると両手を父親に伸ばし、その首を抱き、頬にキスをする。

「もちろん、父さまが一番よ」

走り出したノイとニノンを目で追いながら、
フィニアスは、フロースに腕を出してエスコートしようとする。
彼女は呆れるように言った。

「わたしはこの森で育つたのよ」

「いいじゃないか。あんたを貴婦人として扱ってるんだ」

彼女は彼を見、仕方が無いという表情をして、自分の手をその腕に通す。

そうして二人は、ゆつくりと歩き出した。

木々の、衣擦れの音だけが聞こえる静けさの中、時折、ノイとニノンの声がする。

「ノイは、この森が好きみたい」

沈黙を破るようにフロースが言った。

「そうか、だからニノンはノイを気に入ったんだ。
ディフォーレスト家の血だな。」

プリオベール家の領地は草原が多いんだ。

美しい土地だけれど、ニノンはこの森の方が好きらしい」

「まあ、ニノンは、あなたに似ているのに？」

その時フィニアスは、

「ニノンの笑顔は、あんたにそっくりだ」と言おうとして止める。

この笑顔が好きだったのに、彼女を手放したのは自分だった。

そして彼女が遠くの地で結婚したと聞き、諦めたはずだったのに、彼女の面影がある姪のアデルと結婚してしまった。

フロースとニノンは血で繋がっている。

ノイとニノンの声が遠ざかり、

フィニアスは、

自分とフロースの足音、

そして、時々、彼女の長いスカートが下草に触れる音を聞いていた。

こうして二人で歩いていると、

全てのことは遠くへ行ってしまう、自分たちだけが存在しているかのように思える。

彼は、フロースの横顔を見下ろす。

分かれた時、彼女はまだ二十一歳だった。

あれから、二十年以上の月日が続いているのに、
目の前の彼女は、なんと生き生きして美しいのだろう。
そして、この香り。

「ああ、スパイスだ」とフィニアスは思った。
ラーウスのスパイスが、彼女を遠くへ追いやってしまった。

フロースはフィニアスを振り向くと、「何？」とでも言うように
無邪気な顔を見せる。

そう、その笑顔。

「フロース、キスしてもいいかな？」

フィニアスは、彼女の耳にそつとささやいた。

戯れ

フロースは、につこりすると、右手をフィニアスの前に出した。

「では、わたしにも、ノイと同じような挨拶をしていただけますか？」

フィニアスは、思わず笑った。

自分の夫を裏切る気配など、微塵も見せない。
その上品で洒落のある答えは、彼女の価値を高め、魅力的にする。

フィニアスは、彼女の手を取りキスをした。

彼女は少し身を低くしてそれに答えると、眩しいくらいに爽やかな
笑みを見せる。

「あなたに初めて会った時のことを思い出すわ。
あの時も、あなたはわたしの手にキスをしたのよ」
「では、紳士的な挨拶ということだな」
フィニアスが冗談めいて言った。

フロースは笑い出す。

「いいえ。覚えてないの？
とても無礼だったわ。」

なのに魅力的で・・・

悔しいけれど、ノイの反応を見て、昔の自分を思い出してしまったわね」

フィニアスは驚いて言った。

「無礼なのに魅力的とはどういくことだ？」

「まあ、あなたは、わざとそうしたのよ。

わたしは、とても忌々しい思いをしたのに・・・

あなたに恋してるって知りながら、意地悪して小娘扱いするし、そうそう、料理が出来ないと言ってわたしを馬鹿にしたのもあなただわ。

それなのに、熱烈なラブレターを送ってくるんですもの」

「ラブレター？　わたしが書いたのか？」

「本当に覚えてないのね。

わたしは、感激して泣いたのに。

そうね、その方がいいのかもしれない。

昔のことですもの」

フロースは、ふふふと笑い、再びフィニアスの腕を取り、屋敷の方へ歩き出す。

フィニアスは、ラーウスから直接スパイスを購入しようとして彼女を送り、

交渉は成立したのに、彼女は消えてしまい、
やっと居場所を突き止めたと思ったら、結婚したと聞かされたことしか覚えていなかった。

「一体、わたしは何をしたんだ？
自分がしたことを覚えてないのに、あんたが覚えているのは気に入らないな」

フロースは目を大きく開いたかと思うと細め、満足そうにふふんと鼻を鳴らす。

「いやよ。教えないわ。」

あなたは、わたしをとんでもない目に遭わせたんですもの。
これから一生、そのことを気にするといいんだわ」

「あんたの方こそ意地悪じゃないか。
まあいい、この会話も忘れてしまえばいいことだ」

フロースは、声をあげて笑った。

「あなたらしいわね。」

そう、それがいいわ。
忘れましょう。」

どっちにしても、あなたにとって、わたしは叔母上なのよ。
年下の叔母も乙なものでしょう？」

そうして彼女は、フィニアスの腕にぶら下がるようにする。
フィニアスも、そのふざけに付き合っただけ彼女を支えた。

フロースにとって、自分は兄、もしくは従兄の様なものだ。
この会話も、ただの戯れでしかない。

彼には、そのことは良く分かっていた。

フィニアスは、フロースが、娘の一人を連れて里帰りすると聞いた時、違和感を感じた。

そして彼女が戻る前に、急な出張で出かけなければならず、それが手間取ったので、

このまま、会わずにすむかもしれないと思ったりした。

ところが今、フロースの腕を取り、森の中を歩いている。

彼は、こうしてフロースという時間を、心地よく感じていた。

ニノンが、屋敷のテラスにいるアデルを見つけ、
「母さま！」と叫んで駆け出す。

アデルは、ずっと、彼らの様子を見ていたのだ。

美しい家族

「ノイが、プリオバール家の領地に興味がある？」

フロースの話に、フィニアスは驚いて聞いた。

「いいえ、そうではなくて、ノイは、草原と馬に興味があるのだと思うわ」

それは、しとしとと雨の降る昼下がり、

ノイは、二人の従弟妹たちと広間で遊び、

フィニアスは、赤子を抱いてあやし、

妻のアデルは、『花のお茶会』の招待客のリストを作っている最中で、

フロースは、お茶を飲んでいた。

ニノンと、三歳年上のネイサンは、

遊ぶ振りをしながら、大人たちの会話に耳を敬てる。

それは、ニノンが自分のポニーの話にノイにしたことから始まった。

ノイが乗馬に興味を持ったので、

子供たちは乗馬の計画を立てるのだけれど、問題があった。

三人目の子を産んだばかりの母親は、

フロースの里帰りに合わせて、子供たちを連れてディフォーレスト家に戻っており、

しばらくは、ここに滞在する。

それで、どうしようかと思っている所を、フロースに知られてしまったのだ。

これで、「デイフォーレスト家にも馬がいるのだから、ここで乗馬をなさい」と言われるだろうと、がっかりしていた。

フィニアスは、子供たちの様子を横目で見ながら笑顔で答える。

「わたしは、数日後に領地へ戻るし、ノイを招待するのは構わないよ。」

広い草原を走るのは気持ちがいいからね。

子供たちは、すぐにでも行きたいみたいだから、先に行けばいい。

フロース、君も一緒に行くんだろう」

「もちろん、そうしたいのだけれど・・・」と言ってアデルを見る。

「男爵夫人が留守の城にお邪魔するのは気が進まないわ」

アデルは微笑む。

「アンティ・フロース、どうぞ行つてらして。」

わたしは『花のお茶会』の準備があるから、ここに残るけれど、あなたに、プリオベール家の領地を見てもらいたいわ。

ねえ、フィニアス」

そう言つて、彼女はフィニアスの腕に手を掛ける。

『花のお茶会』とは、ピクニック形式のパーティのことだ。

子爵婦人の自慢の庭で、毎年、花が満開になるころに、幾つかの大きなテントを張って行う。

フロースも以前、母の手伝いをしたことがある。

この準備はなかなか大変で、今は、兄嫁のソフィーと姪のアデルが手伝っているという。

フィニアスは、妻の手に自分の手を乗せると言った。

「そうだな。」

ネイサンは乗馬が上手いし、ホースオブマスターのセスもいる。任せて安心だ。

ノイは馬が好きなのか？」

「そのようね。」

あの子の育ったラーウスには、広々とした草原はないし、ロバがいるだけで、馬はいないのよ」

「馬を怖がらないんだな」

「ええ、怖がらないわね。」

あの子には、騎馬民族の血が四分の一入っているからかしら」

「ノイの目の色は、ラーウス人のものでもないと思うが」

「ダカンレギオン族の女の子だけに現れるんですって。」

最も、今は存在していない民族らしいけれど」

フィニアスは、ダカンレギオンの名をどこかで聞いたような気がしたが、

子供たちが抱きついてきたので、それ以上は考えなかった。

赤子を抱く父親、甘えるようにまとわりつく子供たち、その横で静かに仕事をしている美しい妻。

フロースは、この絵に描いたような家族にため息をついてしまった。

もちろん、自分にも愛する家族がいる。

ところが、自分が生んだとはいえ、ラーウスの子供たちは騒々しい。こんな穏やかな雰囲気とはかけ離れている。

しかも聡明なアデルは、夫より二十歳以上若いのに、てきぱきと仕事をして夫を支えている。

アデルが自分に似ていると言われるのだけれど、

それは血の繋がった者同士というだけで、能力には雲泥の差があるような気がする。

本当に、彼女と似ているのだろうかと思っ

フィニアスが妻として迎えるのは、「人形のように美しい娘」と思っていた。

ところが、彼が望んだのは、こんな女性だったのかと感心する。

あの時の自分を思い出しても、彼が自分を相手にするはずなかったのだ。

彼は自分をからかい、恋愛対象とは見てくれなかった。

彼の関心は、自分をラーウスへ送り、スパイスを購入することで、そのために、ナイフの使い方を教えてくれただけだ。

おかげで、野菜や果物の皮むきは上手になり、料理は得意になった。

そして彼は、今でも、自分をからかうのだ。

彼の妻は自分の姪だというのに、これでは叔母としての権威も形無しだ。

「その手には乗らないわよ」と思うのだけれど、ノイがドキッとしたように、自分もそう感じないわけでもない。

フィニアスは、魅力的な男性で、

時を経て、円熟した大人の厚みも加わっているから、

おそらく、前にも増して、御婦人方を魅了しているのだろう。

「アデルも大変ね」と思ったりする。

とにかくフロースは、子供たちを連れて、プリオバール家の領地へ向かった。

そしてこの旅が、ノイの内に秘められていた血を呼び起こし、様々な問題を引き起こすとは、夢にも思わなかったのだ。

草原へ

「ノートン城よ！」

ニノンが、車の窓から身を乗り出して叫ぶ。

「ニノン！ 危ないから座ってろ！」

ネイサンが、大人のように窘める。

ニノンはふくれっ面をしながら座席に座り、ネイサンはそれを見て満足そうな顔をする。

この八歳の兄は、両親から、小さな妹の世話を任されていた。

フロースは、くすつと笑いたいのを我慢し、自分の娘を見る。

草原を見つめるノイは、いつになく静かだ。

血がそうさせているのだろうか。

ノイの中に流れている血、カシアから受け継いだ目の色・・・倒されても、滅ぼされているわけではなかった。

プリオベール男爵家のノートン城では、留守を守っている者たちが、

子供たちの帰りを楽しみにしていた。

すぐに乗馬ができるように準備もされていて、ノイの練習も始まり、

セスが、「初めてとは思えない」と白い歯を見せながら褒めてくれる。

フロースは、娘を誇らしく思うのだけれど、自分の練習では緊張したのか、体がこわばってしまった。

今更だが、フロースは乗馬が得意ではない。

馬に乗ったのも、ノイの歳ぐらいが最後で、二ノンとさほど変わらない。

馬の上は高く感じて怖いし、広い背中に両足を広げて乗るのも苦手だ。

第一、お尻を突き上げられるような感覚が好きではない。

というより、歩く方が好きなのだ。

自分が走る以上のスピードは、理解を超えるので、馬とは関係ないが、車の運転もしない。

「なんでママの馬は、前に進まないの？」
とノイが言った。

フロースは、「そんなの分からない」と答えようとして言葉を飲み込んだ。

理由は分かっている。

自分と馬の気持ちが合っていない、つまり、馬になめられているのだ。そんなことを娘に説明するのも恥ずかしい気がする。

とにかく、気持ちを切り替え、セスに助けってもらって馬を歩かせる。

その日は中庭で練習するというので、

自分は少しでも練習して、部屋に引き上げることにした。
フィニアスが言ったように、セスに任せておけば安心だし、
ノイも大人しく練習しているので大丈夫だろう。
というより、ノイは、乗馬のへたな母親が消えた方がいいに決まっ
ている。

案内されたのは、二階の風通しの良い部屋だった。
大きな窓があり、空が広く感じられ、乗馬の緊張から解かれ、心が
開放されていく。

フロースは、思わず、「ああ」と声を出した。

ラーウスにある自分の家も、エルナトの湖を見渡せる高台にある
のだけれど、
それとはまた違った美しさがあり、いくら見ても飽きない。

時々、そよ風に乗って、馬と子供たちの声が聞こえてくる。
それらは遠くから聞こえてくる様に感じ、平和で、心地よい。

プリオベール家の領地。

フィニアスが言ったように、なだらかな起伏の草原が広がっている。
所々に、小さな林のような木々の集まりがあり、
秋になれば、
その木々の葉は色付き、美しいだろう。

そして、ノートン城。

フィニアスは、ノイぐらいの年頃の時、父親が破産で自殺してしま
い、

ここから持ち出せる限りの物を盗って逃げたのだ。

その後フィニアスは、

想像もつかないような葛藤や努力の末に、領地を買い戻したのだけ
れど、

今は、そんな過去など無かったとでも言う風に、静かな佇まいを見
せている。

さて、次の日、ノイの上達が早いので、草原に出ることになった。
フロースと三人の子供たちに、セスと厩務員のロイが同行して、六
人は出発する。

草原とはいえ、どこでも走っていいのではない。

馬が、プレーリードッグの巣穴に足を取られないように気を付けな
ければならないので、

ロイが先頭に立つ。

もちろん、巣穴を壊すつもりもない。

プレーリードッグは草原を健康に保ってくれるので、土地の者たち
は大切にしている。

次第に、フロースとニノンが遅れがちになった。

ネイサンはつまらなそうにするし、

急がされるニノンも不機嫌になり、言い争いが始まる。

それでフロースは、セスにネイサンとノイを頼み、

自分とニノンは城へ戻ることにした。

ニノンは不服だったけれど、馬とポニーの差は歴然としている。

フロースは、ノイと馬が一体となり、すべるように走って行くのを見て胸が熱くなり、

込み上げてくるものを感じた。

とても乗馬が二日目とは思えない。

子供を馬の背中で育てるというダカンレギオン族の娘だったカシアも、

幼い頃から、このように馬を走らせていたはずだ。

カシアが馬に乗ったと言う話は聞いたことがない。

もしかしたら、故郷を離れた後、一度も乗らなかったのかもしれない。

馬も、草原もないラーウス。

彼女は、そこに安らぎを見出したのだろうか。

そしてフロースは、遠くを走る馬の一団を見かけた。

馬は十頭ほどおり、誰かが集団で乗馬をしているらしい。

その雄々しい光景を見ると、馬が苦手な自分でも、ぞくぞくするものを感じる。

ダカンレギオン族も、こんな風だったのかもしれないと思いながら、フロースは、ノートン城へ戻った。

馬たち

ノイは手綱を緩め、馬にバランスを取らせる。

息遣いは荒いけれど、落ち着きを取り戻しているようだ。

それでも、注意は怠らない。

荒々しく鼻息を立てている馬たちに、囲まれているのだ。

その馬たちは、林の切れ目から急に現れ、ノイの馬を驚かせ、彼女も驚くのだけれど、

頭の中は冷静で、どうすればいいのか身体が反応していた。

落馬する者もなく、馬たちは静かになり、

ノイは、あたりを見回す。

林の向こうから差す日の光を受けて、馬たちの汗が白く光っていた。

寒くはないのに、それが熱気となって上がっているような気がする。土埃が舞っているせいかもしれない。

馬たちは、ゆつくりと、無造作に、ノイの周りを動き回っていた。歩きながら首を振っているものもある。

それはスローモーションのようで、馬の顔の一つ一つ、目の動きまで分かり、

大きな目で、話しかけているようにも思える。

誰かが馬の首に手を伸ばし、軽くたたく。

ノイは、彼を見た。

その頃、フロースは城に戻っており、ニノンの相手をして遊ばせながら、ラーウスに残してきた子供たちを思っていた。

ノイには、留学中の双子の兄たちがおり、下にも妹と弟が一人ずついる。妹もノイと同じ色の目をしており、一番下の子はネイサンと同じ年だ。

下の子たちも連れてきたかったのだけれど、ラーウス人の子供は活発すぎるので、ナニーを伴っても、子供を三人も連れて旅行するのは無理なのだ。首都のエスぺビオスにすら、たどり着けなかっただろう。

ノイを連れて来るのは、さほど心配していなかった。お腹の中にいるころから、女の子だと思えるような穏やかさがあつたし、ラーウス人の子供たちの中でも、大人しい方なのだ。黙って考えていることが多く、本を読むのも好きだ。

双子の兄たちが活発過ぎたので、ノイを育てるのは楽だった。騒ぐ兄たちが、反面教師になっていた可能性もある。そんな所は自分に似ていると思ったのに、皆は、父親似だと言う。あの騒々しい息子たちの方が、母親似と言われるのは、理解に苦し

むが、

ノイが、ラーウス意外の土地に順応しているのは嬉しいことだった。

いや、イベリスに釘を刺されている。

彼は、ノイをラーウスの外に嫁に出すつもりはない。

それなら、「故郷を離れたわたしはどうなのよ」と思っただけれど、父親とは、そういうものなのだろう。

午後遅くなつて、ノイたちは戻ってきた。

ノイが興奮している。

興奮するのはしょっちゅうなので、珍しいことではない。

それでもフロースは、ノイの目に輝きから、何かが違うと感じる。

「公爵家の、モーリス様の一行に鉢合わせしたんですよ」
セスが、馬の背中を拭きながら言った。

「公爵家？」

「はい。」

隣りには、デュパール公爵の別邸があります。

モーリス様が、御学友たちと乗馬をしておられて、
すっかりこちらの領地に入られ、ノイ様の馬を驚かせてしまった
んです。

モーリス様は、公爵家の次の後継者に選ばれたばかりですから、
土地の境界を、あまりご存知ないのでしょうか。

明日、お詫びに来说ると言っておられました」

フロースは、帰りがけに見たのは、その一団だったのかと思った。

馬の一団、

ダカンレギオン族を思わせる若者たちの集団。

ノイはそれを見て興奮したに違いない。

ラーウスには草原が無いし、馬もない。

騎馬民族と言っても、想像もつかない。

その民族の出だった祖母のカシアは、とうの昔に亡くなっている。

ノイにとって、それは遠い世界のことでもしなかった。

ところが馬に触れ、馬の集団を見て、内にある何かが呼び起こされたような気がする。

では、モーリスは？

そのモーリスとは、どんな青年なのだろう。

ノイは？

娘は、彼のことをどう思ったのだろう。

フロースは、明日来るといって、公爵家の若き後継者に興味を持っていた。

噂

翌日、フロースは、自分一人でモーリスに会うことにした。

それは、セスが、

「若者たちは、わざと、ノイの馬を驚かせようとしたようだった」と言っただからだ。

若者たちの良くない噂も聞くと言う。

領主に仕える者たちは、忠誠心のある者が多い。

彼らは、大切な働き手として扱われ、給料も良く、

自分たちの仕事にプライドも持っており、内情にも通じている。

だから、自分の主人の立場を悪くするような噂話などしない。

もちろん、それは領主にもよるが、

モーリスは、新しく決まった後継者で、仕える者たちも慣れていなかった。

悪く言わないにしても、滞在している客たちへの不満が洩れてきたりする。

モーリスは、大学の休みがあると、友人たちを伴ってやって来るそうだ。

友人たちは、乗馬クラブに所属しているのだけれど、遊び半分の者たちが多い。

それで、ひんしゆくを貰うようなこともあったらしい。

セスは、少し心配したのだけれど、

フロースには同じ年頃の息子たちがいるので、まかせることにし、自分は子供たちを連れて、城の外へ出て行った。

さて、モーリスは、友人二人を従えてノートン城にやって来た。その二人が、ノイの馬を驚かせた者たちだと言う。

「昨日は、こちらの皆様に迷惑をかけてしまいました」
モーリスの礼儀正しい挨拶に、フロースは笑顔で答える。

彼は、公爵家の後継者と言うより、普通の学生のように見えた。そして、モーリスから、自分の息子たちとは違う何かを感じる。それが何なのかはつきりしないのだけれど、それよりフロースが気にしたのは、二人の友人たちの方だった。

この二人は、こちらを馬鹿にしているような風なのだ。とはいえ、それは若さにありがちな横柄な態度で、笑って見逃した方が良いのかもしれない。

どちらにしても、ノートン城の主人、フィニアスが不在ではどうしようもない。

「お嬢さんと男爵のご子息を、我々の乗馬に誘いたいのですが」
モーリスが聞いた。

フロースは彼を見る。

セスは、「モーリスの馬の扱い方は上手い」と言っていた。彼の友人たちも、同じレベルなのだろう。ネイサンも、八歳とはいえ乗馬が上手い。

ところがノイは、いくらセスが褒めてくれても、初心者でしかない。

そんな若者たちが、足手まといになりそうな十六歳の娘を誘うとしたら、乗馬意外の目的があるからだ。

「お誘いは嬉しいのですが、プリオバール男爵がいらっしやいませんし、わたしには決めかねます。

男爵は、明後日には戻って来られるので、よろしければ、その時に尋ねてみてはいかがでしょう。ああ、そうでした。皆様は、休暇を終えて帰ってしまわれるのでしたね」

フロースは、彼らの試験休みが終わろうとしているのを知っていた。

そして、自分の娘に若者たちが接近するのを警戒している素振りを見せる。

例え、娘を誘惑する気はなくても、馬を扱うには十分な注意が必要だ。

この訳の分からない若者たちを信用する気にはなれない。

モーリスは、母親の意図に気付いたのか気付かなかったのか、
「そんなことはどうでもいい」とでも言う風に話題を変えた。

「マダムは、男爵夫人の叔母上とお聞きしましたが、
エスピオスに住んでおられるのですか？」

フロースは、なんでそんなことを聞くのかと思う。
彼は友人たちの無作法な態度にイライラしている風なので、そのせいかと思ったりする。

「いいえ、わたしは、ラーウスに住んでいます」

「ラーウス？ 聞いたことがあります」

「帝国からかなり離れた辺境の地です」

「そうですか・・・」

お嬢さんの目の色がとても珍しかったので、帝国の人間ではないのかと思いました」

「ああ、それは娘の父親、わたしの夫が、

ラーウス人とダカンレギオン族との混血だからでしょう」

モーリスは、驚いたようにフロースを見た。

フロースも思わず聞く。

「ダカンレギオン族をご存知なのですか？」

モーリスは、少し躊躇した後に短く答える。

「もう絶えてしまった民族だと聞いています」

そして退屈そうにしている友人たちに、ちらつと目をやり、
『彼らが、これ以上余計なことをしても困る』とでも言うように、
「ここら辺でおいとました方が良さそうです」と続けて言う。

「今日は、お嬢さん方を見かけませんね」

「ええ、昨日とは反対の方へ出かけています」

「そうですか。では、マダム」

と言って、モーリスたちは部屋を出て行った。

フロースは、彼がダカンレギオン族を知っているのだと思った。

彼がノイに興味を持った理由。

それは目の色だったのだろう。

どこかで聞き、単なる興味を持っただけかもしれない。

とにかく、フィニアスが戻るまで待つしかない。

ところが、ノイの方はそうではなかった。

ノイは、遠くからモーリスたちを見つけ、追いかけてしまったのだ。

ネイサンとセスも一緒だったので、

母親が心配するようなことはなかったのだけれど、

ノイとモーリスは、翌日に会う約束をしてしまった。

こうなると、若い二人に「会うな」と告げても、隠れて会うだけだ。

翌日、ノイは上機嫌で出かけていった。

ネイサンも、年上の若者たちと乗馬ができるので嬉しそうだ。

フロースに出来ることと言えば、

ノイが、ネイサンやセスと一緒に行動する、
ということを守らせることだけだった。

やりたいこと

虫たちが飛び交う陽の光の中、馬たちは、小川の水を飲んでいたり、走り回ったので、かなり喉が渴いていたらしい。

ノイは、その音を聞きながら、顔を上げる。

木の枝に、ノスリが止まっていた。

ノスリは獲物を見つけたらしく、ふっと、落ちるかのように枝を離れ、ぱっと翼を広げると降下し、藪の向こうへ消えていった。

それを見送り、振り向いたノイは、モーリスと目が合う。彼は、馬と共に小川の中に立っていた。

「モーリス様」

そう呼んだノイに、モーリスは、笑いながら川から上がる。

「様と呼ぶのは、やめてくれ」

ノイは、セスが「モーリス様」と呼ぶので、自分もそれに従っていた。

「モーリス・・・あなたは、馬が好きなのね。馬もあなたを好きみたい。」

将来は、厩務員になるの？」

その質問も、モーリスを笑わせる。

「いや、僕は公爵になるんだ」

「馬を扱うより、その方がいいの？」

今度は、驚いて聞き返す。

「君は、公爵が何だが知らないのか？」

「公爵は貴族でしょう？ わたしの祖父は子爵だし」

「だったら分かるだろう。公爵の方がいいに決まってるじゃないか」

「そう？ セスは、厩務員の方がいいって言うと思うわ」

モーリスは、呆れてノイを見る。

比べても仕方の無い事を言ってるのに、彼女の目は真っ直ぐだ。

こっちの方が恥ずかしくなり、目をそらす。

彼は、ノイとの会話を不思議に思っていた。

世間知らずの様なんだけど、無知ではない。

かと思ったら、突拍子も無いことを言ったりする。

自分が公爵家の後継者になると決まり、以前の友人たちは離れていった。

そして、利害関係で見る連中が集まってくる。
女の子たちも同じで、中には公爵夫人の座を狙っている者もいる。
ところがノイは、そんなことに関心はない。

「今日は、あなたのお友達は、半分しかいないのね」

モーリスは、はっとして顔を上げた。

「ああ、授業が始まるから、そろそろエスぺリオスへ戻らないとね。
君の学校はどうなんだ？」

「学校？ ラーウスに学校はないわ」

「ええっ？ じゃあ、ラーウス人は字も読めないのか？」

「読めるわよ。」

あなたが通うような学校が無いだけで、
だから、わたしの兄たちは、ウィリデイス王国へ留学しているの
よ。

妹は、最近読み始めたから、お土産に沢山の本を欲しがっている
し、

弟は、まだ読めないけれど、そうね、地理の本がいつて言っ
たわ」

「ちょっと待ってくれ。」

君の弟は、八歳だろう？ 字も読めないのに、地理の本が欲しい
のか？」

「ラーウスでは、大人たちが、子供たちに本を読んで聞かせるの。」

その内、興味が出てきたら、自分で読むようになるわ。

妹は、百科事典を読み終えてしまったし、本を選んでいるんだけど・

・

ねえ、あなたのお友達で、知らない本を持っている人はいるかし

ら」

「大学の教科書？」

「本当！？ 喜ぶわ。」

わたしは、兄に貰ったんだけど、読ませろって煩いんですもの」

モーリスは、ラーウスは変わった国だと思った。

だからノイの価値観も違うらしい。

「モーリス、あなたは大学で、公爵になるための勉強をしているの？」

「えっ？」

彼は、その質問にも困る。

「公爵になるための勉強とは違うけど、

どうなのかな・・・

教養課程で学んだのかもしれないけど」

「教養課程って面白いの？」

「いや、基本的な教養は身につけた方が・・・」

と言いかけて、突然、心の奥に秘めていた思いが溢れ出す。

「僕が子供の頃の話なんだけど、

父が、荒野にある古い墓に連れていってくれてね。

考古学者が掘り返していて、
幾つかの棺が掘り出され、CT撮影をして、それから元に戻す
だけだ、

一つの棺だけは開けられらんだ。

それは数百年も前の若い女性で、ミイラ化していたのに、
数日前に死んだばかりのようで、
長いまつ毛が綺麗だった。

一緒に埋葬されていた物も調べ、穀物の種まで入っていてね。
それらの情報から、

その民族が、どこから来たのかを調べることが出来るんだ。

あの時の興奮は忘れられない。

それから僕は、アンソポロジーに興味を持つようになったんだ」

それから、はつとしてノイを見る。

「こんな事を女の子に話してもしょうがない」と思ったのだ。
それなのに、ノイは、ニコニコして聞いていた。

「それが、モリスのしたいことなのね。
人類学者になりたいの？」

彼は、顔を曇らせる。

「いや・・・」

じゃあ、ノイは何のために学んでるんだ？」

「幸せになるためでしょう？」

「幸せ？」

「だって、生まれた時は何も知らないから、

どうやって幸せになるのか、分からないじゃない。
わたしたちは、幸せになるために生まれてきたんでしょ？」

モーリスは、また彼女の顔を見つめる。

彼女の目は、銀色がかった緑色で美しい。

それは、キラキラと光って表情を豊かにしている。

「幸せになる」

当たり前なことなのに、何と難しいのだろう。

モーリスは、恐る恐る手を伸ばし、ノイの頬に触れようとす。

その時、セスの声がした。

「ノイ様。そろそろ行きましょうか」

二人は、振り向く。

ノイは、セスの方へ走っていった。

相槌

「モーリスの祖父は、ダカンレギオン族だ！」

突然、フィニアスが声を上げた。

ノートン城に戻り、

フロースから、数日間に起こった事を聞いたフィニアスは、

「公爵家に、ダカンレギオン族の者がいる」

と、子供の頃に聞いたのを思い出したのだ。

「じゃあ、どうしてモーリスは、そのことを言わなかったのかしら？」

フロースは、ノイと同じような子孫がいることを知り、嬉しく思うのだが、

モーリスの不可解な態度が腑に落ちない。

「さあ・・・色々な事情があるんじゃないのか。

デュパール公爵家の男子は、絶えてしまったからね。

モーリスは、公爵の従妹の孫で、次の後継者に決まったのはつい最近なんだ」

フィニアスは、公爵家と親しくない。

というより、今の公爵は、かなり年を取っており、公の場に顔を出さなくなって久しく、

交友関係を広げるところか、親しかった者たちは死んでいき減少している。

デューパール公爵は、長い間、自分のステイツを守ることに徹していた。

若者たちの出入りが少ない分、安定してると言えば、聞こえは良いが、

古い考え方に固執していると言った方が良い。

そんな中、モリスが、次の後継者に選ばれるのだけれど、

彼の祖父は異国人だったし、母親も平民だ。

父親を早くに亡くし、畑違いのところから連れてこられた若者には、公爵の荷は重いだろう。

社交界でも、「学生なので、勉強に専念している」との情報しかなかった。

公爵すら顔を出すことが少なかったのだし、話題にしても続かず、

「その内、現れるだろう」ぐらいのものだった。

フィニアスも、気にしていなかった。

公爵が別邸を訪れることは少なく、隣同士で揉めたこともない。モリスが徒党を組んで乗馬をしていると知り、驚いたぐらいで、若者たちの些細な問題はあっても、公爵家での事なのだ。

降って湧いたように現れた公爵家の若者。

そして、フロースの娘。

ノートン城にも、春のような賑やかさが訪れたようで、フィニアスは面白いと思うが、フロースは、楽しむ気になれない。

フィニアスは、肩肘をついて手の上に顎を乗せ、フロースが、あれこれ話すのを眺めている。

眺めるだけで、聞き流す。
時たま相槌を打つが、好きなだけしゃべらせる。

そうしながら、フィニアスは、不思議な気がしていた。
自分たちが、まるで、娘を心配する夫婦のようなのだ。

ニノンはまだ幼い。
十年後、自分とアデルも、このように、ニノンのことで会話する
のだろうか。

いや、もし自分がフロースと結婚していたら、
ノイのような娘がいて、
モーリスに熱を上げ、
今、こうして、
フロースの話を聞いているのかもしれない。

何故、フロースを行かせてしまったのだろう。

何故、あの時、彼女を愛しているのに気付かなかったのだろう。

彼女が自分に恋しているのに気付いていたのに、それを深く考えなかった。

むしろ、気付かないふりをしていた。

そう、わざと、自分の気持ちに気付こうとしなかったのだ。

「どちらにしても、ノイが公爵家と関係を持つなんてありえないわね」

フロースが、ため息をつきながら言った。

フィニアスは、ふふつと笑う。

「そうだな・・・弄ばれるのがオチだ」

フロースは、厳しい目をフィニアスに向ける。

「分かってるよ。」

彼が大学へ戻る前に招待しよう。
一度は会っておきたいし」

フィニアスは、余計なことを言っ
て失敗したと思い、娘を思
うフロースの真剣な眼差しに、苦笑いしながら答えた。

混沌とした思い

次の日、モーリスはノートン城へやって来た。

フィニアスは笑顔で向かえ、ノイは、はにかみながら挨拶をし、フロースは挨拶の後に、ディナーの時間になるまで、子供たちの相手をする。

そして、会話している三人を眺める。

ノイの服は、貴族の娘が着るようなドレスというより、若草色の、こざっぱりしたワンピースだった。

ノイは、シンプルすぎないかと心配していたけれど、彼女の清楚さを引き立てている。

モーリスは、フォーマルな服装をしていた。

フロースは、前に彼に会った時、影があると思ったのに、今日は、そうでもないと感じた。

形式ばった感じもない。

あの時、彼は、緊張していたのかもしれないし、自分も、彼の友人たちの方に注目していたので、勘違いかもしれない。

しばらくして、彼の立ち方に、堅苦しさを感じないのだと気付いた。

かかとを付け、真っ直ぐ立っているのに、リラックスしている。
数時間は、こうして立っていられるはずだ。

この立ち方には訓練が必要で、急に身に付けられるものではない。

公爵になると決まったのは最近だし、
どこで身に付けたのだろう。

フロースは、その意外性に魅せられるのだけれど、
ノイが、彼に惹かれる理由も分かった。

フィニアスも同じだ。

フロースは、ノイが、初めてフィニアスに会った時、顔を赤らめたのを思い出す。

そして、思わず笑ってしまった。
やはり、自分の娘なのだ。

ディナーを済ませ、シッティングルームへ移動し、
話題は、ダカンレギオン族になった。

「祖父は、十代の頃に帝国へ送られたのです」
モーリスは、ゆっくりと、ティーカップをテーブルに置きながら言った。

お茶の香りが漂う。

「その頃、部族内には抗争があり、同盟国との協議の末、祖父は、人質として帝国に送られたと聞いています」

「人質？」

フロースが驚いて聞いた。

「ええ。

ですが、祖父は争い事に感心がなく、拒まなかったそうです。それに、曾祖父が出来る限りのことをして送り出したので、不自由しなかったとも言っていました。

そして民族は消滅し、祖父は一人、生き残ったのです。

祖父の子供は父一人ですし、僕にも弟がいるだけで女の子はいません」

そしてノイを見る。

「ですから、ノイのような目の色について聞いてはいましたが、見るのは初めてなのです」

「グエノラビと言う名前を、聞いたことはありませんか？」
それは、フロースが聞きたいと思っていたことだった。

ノイの祖母、カシアは、自分の花嫁衣裳に、その名前を刺繍していた。

彼女は、出生の名を誰にも告げることなく死んだので、それが本当の名なのかも分からないでいる。

「いいえ。

聞いたことはありません。

祖父は、馬の扱い方を教えてくれましたが、

自分の民族について多くを語りませんでした。

生きていたら、ノイに会って喜んだと思いますけどね」

フロースは、モーリスが話すのを聞きながら、

自分が彼から感じたものが、何なのか分かったような気がした。

プライドだ。

彼は、祖父の影響を受けている。

では、彼が、あの若者たちを周りに置くのは何故なのだろう。

彼らは、すでにエスピオスに戻っている。

投げやりな感じのする若者たちだった。

刹那的だと言えるかもしれない。

そうして夜は更け、
モーリスは、迎えの車が来たので皆に別れを告げ、フィニアスと共に部屋を出た。

彼は、フィニアスが、自分に言いたいことがあるのだと分かっていた。

「男爵、あなたは、僕がノイに近付くのを懸念しておられるのでしょうか？」

モーリスの質問に、フィニアスは冷笑するように答える。

「それはない。
明日、あなたは大学に戻るし、
来月、ノイは、遠い地にある自分の家へ帰っていく。
あなたは、そんなことを気にしていたのかね？」

モーリスは、自分が仕掛けた挑戦を簡単に交わされ、むっとする。

「僕は、ノイに関心はありません」

「それは良かった。
ノイの母親に、そのように告げておこう。
というより、彼女が心配していたのはあんたじゃなくて、
取り巻き連中の方だったんだがね。
あんたもそれを感じたから、彼らを先に帰したんだろう？
ノイの乗っていた馬を驚かせたりするし」

「あなたは、彼らに会っていない。
人から変な噂を聞き、安易に判断しているだけだ。
それとも、僕の友人たちを侮辱するのですか？」

「これは驚いた。

彼らが、あんたの友人だったとは。

あんたは、友人の定義を知らないらしい」

「これ以上の侮辱は許さない！」

フィニアスは、感情を高ぶらせていくモーリスを睥め、それから言
った。

「モーリス、噂話と評判は違う。

あんな連中を従えて、あんたは何をしようと言っのかね。
彼らは、あんたを利用しているだけだ」

「あなたに、僕の気持ちなんて分からない！」

フィニアスは笑い出す。

「人の気持ちなんて、他人に分かるはずはない。

あんたは、まだ子供だね」

「男爵家に生まれ、

のうのうと生きてきたあなたに、分からないと言っ意味で言っ
たんだ」

フィニアスは、深く息を吐いた。

「あんたが何を悩んでいるのかは知らんが、ゆっくり考えればいい。時間は、たっぷりあるはずだ」

フィニアスは、おせっかいだと思ったが、それだけ言うことにした。

モーリスはそれに答えなかったし、フィニアスも黙って彼を送り出す。

そうしてモーリスは、ノートン城を出て行った。

短剣の秘密

夜の静けさがノートン城を覆う。

訪問者は去り、子供たちは寝室に下がっていた。

そしてフィニアスは、別の静けさに気付く。

フロースが、ひとり、広間の壁を見上げていたのだ。

「フロース」

と彼が呼ぶと、彼女は振り返る。

彼女が見ていたのは、壁にかけられた古い短剣だった。

フィニアスもそれを見上げる。

その短剣は、彼がフロースと別れた時、彼女に持たせたもので、スパイス交渉の後、返してもらう約束をしていた。

ところが彼女は戻らず、短剣だけが送り返されてきたのだ。

「これは、わたしが借りていた短剣でしょう？」

あの時は、使い古されていて、傷もあちこちにあったのに、きれいになって、

とても同じものだなんて思えないわ」

フロースは、関心しながら見ている。

「手に取ってみたらいい」

彼がそう言ったので、

フロースは手を伸ばし、短剣を取ろうとするのだけれど、フックから外れない。

彼は、外すのを助けようとして、彼女の頭の上に手をやった。

その時フロースは、懐かしい雰囲気にもまれる。

彼の手が作る影だ。

フロースは、彼の手が自分の額に触れようとして影を作り、目を瞑ったのを思い出す。

それはフロースが高熱を出し、エスぺピオスにある彼の屋敷で看病された時のことで、

そうして彼女は、彼の優しさを知り、恋するようになったのだ。

フロースは、ふふふと笑う。

フィニアスは、短剣を取りながら怪訝な顔をした。

「また、変なことを思い出したんじゃないだろうな」

「そうじゃないわ。」

あなたが、病気のわたしを看病してくれたことよ」

「ああ、それは・・・」

とフィニアスは言つて、目をそらす。
そんなこともあつたなと思う。

「あれは、家政婦のデルフェ婦人がやったことだ。

そういえば、あんたは、

エスぺビオスへ戻つたその足で、婦人に会いに行ったそうだな」

「ええ、デルフェ婦人には、戻つて来るつて約束していたのよ。
それなのに、こんなに長く戻れなくて申し訳なくて・・・
元気な婦人に会えて、本当に嬉しかったわ」

「あんたは・・・」

とフィニアスは言つて、言葉を止めた。

「戻つてくると約束したのは、自分にではなかったのか」と言おう
としたのだ。

そして、

「どうして、すぐに戻つてこなかった」と聞きたかつただけけれど、
今更、答えを聞いても仕方が無い。

フロースは目を輝かせながら、彼が言い終えるのを待っている。

「デルフェ婦人に、『また会いに行く』と言ったそうだな」

フィニアスは、言おうとしていたことを変えた。

フロースは、微笑む。

「ええ、ちょっと会っただけで、ゆっくり話せなかったんですもの。『花のお茶会』の後に行くことにしているの」

そう言いながら、フロースは、フィニアスの持っている短剣を見る。

彼は、それを持ったままだった。

彼女が短剣を受け取ると、両手だったのに、重みで落としそうになる。

「こんなに重かったかしら」

「宝石を付け直しただからね」

その昔、フィニアスは、城から短剣を盗み、宝石を剥がして売り、

本体は護身用として持ち続けていた。

城を買い戻した後も、新しい宝石を付けることなく、
みすばらしいままでも、直す気がしないでいた。

フロースは、指の先で、そっと、プリオベール家の紋章を撫でる。

フィニアスは、彼女の身を守るために、自分の短剣を持たせた。
スパイスの交渉は秘密裏に行われ、フロースの身分も隠さなければ
ならず、危険が伴ったのだ。

短剣に付いた紋章は、はつきりと見る事が出来た。

男たちは、この短剣を持った彼女が、フィニアスの女であることを
知るので、
手を出さないはずだった。

彼女は、その理由を知っていたが、「意味」には気付かなかった。
今でも、その深い意味を知らない。

フロースは、しばらくの間、短剣を眺め、それからフィニアスに
戻す。

フィニアスは、それを壁にかけた。

短剣の装飾を直したのは、フロースが戻らないと知ったからだ。

フィニアスは、その時の自分の気持ちを思い出す。

あれから時が過ぎ、二人とも違う人生を歩んでいる。

たとえ彼女が、こうしてそばにいても、心に壁を築こう。
壁を築いて、気持ちを封じる。
その思いを、置き去りにするのだ。

「明日、デイフォーレスト家へ戻るわ」

フロースが言った。

フィニアスが振り返る。

「わたしも、『花のお茶会』の手伝いをしたいし。
モーリスが、ネイサンにジュニア馬術競技に出るよう勧めたでし
よう。」

これからセスは忙しくなるから、ノイは邪魔になるだけよ。
明日、モーリスもエスペリオスへ戻ってしまうし、
短かったけれど、ノイの恋も終わりね」

「ああ・・・」
とフィニアスは答えた。

モーリスは、「ノイに関心はない」と言った。

「そんなはずは無い」と思うのだけれど、それでもいい。これから先、若い二人には、出会いなどいくらでもある。そして、別れも。

モーリスとノイの恋は、終わったのだ。

とにかくフィニアスは、これで事は済んだと思った。

しばらくは、モーリスに会わないだろうと思っていたら、すぐに再会することになる。

アデルが、彼を、『花のお茶会』に招待したのだ。

アデルは、

「ネイサンを乗馬に誘ってくれたお礼を兼ねて招待した」と言うのだが、

次の公爵と交友関係を結びたいと言うのが本音だ。

フィニアスは、妻のしそうなことだと思った。

妬心

フロースは、立ち鏡を覗いた。

新しいドレス姿のノイが写っている。

帝国のドレスは窮屈だと言っていたのに、嬉しそうな顔が微笑ましい。

ノイの、オリーブ色の肌に似合うドレスは、上品で、

祖母の子爵婦人が選んでくれたものだった。

子爵婦人は、フロースのドレスも選んでいる。

そして、孫の肌は健康的で美しいと褒めたのに、娘には、日焼けし過ぎと文句を言った。

ラーウスの自然の中で生活する彼女らの肌は濃く、帝国人の紳士淑女のとは違う。

とはいえフロースの心配は、自分の日焼けではなく、ノイの恋心だった。

ノイは、今日の『花のお茶会』でモーリスに会えると、心をときめかしている。

ところがモーリスの方は、「ノイに関心はない」と言ったのだ。フロースは、そんなことなど知らない娘に、複雑な心境になる。

フロースは、モーリスがノイの目の色に興味を持っただけだと思っていた。

公爵になろうとする青年が、
ラーウスなど、聞いたことも無い、辺境の山の中で育ったような娘
に関心を持つはずは無い。

「それにしても、何て美しいのだろう」とフロースは、自分の娘
を誇らしく思う。

恋心は、こつも人を美しくするのだ。

今日は、三百人を越える客が来るのだし、

モーリスは、紳士的にノイに接してくれるだろう。
十六歳のノイには、それで十分だ。

フロースは、この日を、ノイの良い思い出の日にしてあげたいと思
った。

『花のお茶会』はフロースの母が始めたものだった。

元々は、親しい友人たちを招き、咲き誇る花を楽しむ小さなものだ
ったけれど、

宮廷内で勢力のあるディフォーレスト子爵の交友関係を表し、
招待されるかどうかは、社交界でも話題になる。

それを手伝うアデルも、

祖父や父と共に、人脈やチャンスを広げるのに利用していた。
モーリスも、この機会を利用しない手はない。

『花のお茶会』が始まり、

フロースは、ノイから少し離れた所で見守りながら、ノイがモーリスに付かず離れずしながら楽しんでいるのを見て、ほっとしていた。

「あんたは娘の方が大事で、この機会を利用するのには関心なさそうだな」

フロースの後ろから、フィニアスの声がした。

フロースは振り向く。

彼は彼女を観察していたのだ。

「わたしは父のようではないわ。

あなたに散々馬鹿にされて、

自分にはその能力が無いって悟ったのよ」

彼女は、冗談交じりに答える。

フィニアスは笑った。

「わたしは、そんなことも言ったのか。

まあ、確かに、あんたはアデルの様ではないな。

似ているが、やはり違う人間だ」

「当然でしょう。

わたしに似合うのは主婦の仕事よ。

それだって大変なのよ。

料理に子育て、家の管理もあるし、人脈だの何だのって、わたしには無理よ。

あなたにも騙され、利用されてしまったし。

そういえば、何だか知らないけれど、夫から分厚い封筒を預かって父に渡したわね。

今回も、訳の分からないことで使われているみたいよ」

「確かに、あなたにはそれくらいが似合っている」

「まあ、褒めたつもり？ 貶しているみたいだわ」

そうして、二人は笑った。

いつもなら、客の接待で忙しいフィニアスなのに、今日は、フロースとの会話を楽しんでいる。

フィニアスは、フロースといると、時がゆったりと流れていくような気がしていた。

自分を素に戻してくれるような心地よさがある。

ところがアデルは、そんな夫の様子を見て、自分の気持ちが押し上げられていくのを感じた。

彼女の心の内に留められていた思いは募り、その籐をはずしたのはノイだった。

モーリスと会話していたアデルは、横にいるノイを邪魔に思ったのだ。

ノイは、会話に入ってきて来る訳ではないのだけれど、モーリスに恋心を抱いているその雰囲気、アデルをイライラさ

せる。

そして、自分の夫と親しそうに話すフロースと、公爵になるうとしてゐる青年に關心を持つ彼女の娘が、どうにも癪に障って仕方が無い。

アデルは、皆にも聞こえるように言った。

「叔母のフロースが久しぶりに里帰りすると聞いた時、皆で喜んだのですよ。

わたしは、叔母に似ていると言われていましたし、再会できるのを楽しみにしていました。

ところが会ってみて、とても驚いたのです。

以前の叔母は、洗練されて美しかったのに、田舎での生活は人を変えるものですね。

ラーウスなんて、辺境の地にお嫁に行かれて、

夫のイベリスとやらに、苦勞させられているのではないかと心配です。

お気の毒ですわ」

それを聞いたノイは、自分の両親が馬鹿にされたと思った。

ノイにとって、アデルの言い方は挑戦したことになり、受けて立たねばならない。

それはラーウスのどこにでもある子供染みた騒動で、大人はそんな挑戦には乗らない。

ノイは、まだ子供だった。

アデルの言葉はフロースにも聞こえていたのだけれど、時はすでに遅い。

ノイは、アデルの前にあったお茶や菓子の乗ったテーブルをひっくり返した。

涙

ティーカップや皿は音を立てて割れ、
周りは騒然となり、

ノイはアデルに飛び掛ろうとする。

そして動きが止まった。

フロースが、間一髪でノイを止めたのだ。

ノイは、自分を抱きかかえている母親を見て我に返る。

周りの人々の驚いた表情からも、
自分が、とんでもないことをしたのだと分かる。

モーリスも、目を丸くしている。

ノイはいたたまれなくなり、その場から逃げ出してしまった。

それは、あつと言う間のことで、

そこにいた人々は、何が起きたのか理解できないほどだった。

ノイがアデルに飛び掛ろうとしたのも、

お茶やケーキが、アデルの美しいドレスを汚してしまったので、
あわててそれを直そうとしているようにも見えた。

例え、ノイがアデルの言ったことを気に入らなかったとしても、この娘が、人前で喧嘩するなど思いも寄らない。

人々が見ていたのは、ノイではなく、ひっくり返されたテーブルの方だった。

フロースは皆に謝り、ノイの後を追った。
そうしながら自分を責める。

娘の気性を知っていたのに、と思った。

ノイは、激しい性格で知られているラーウスの子供たちの中でも、大人しい方だった。

旅行中、何度も話し合ったし、それに良く答えてくれて、問題を起こすことはなかった。
だから油断してしまったのだ。

今日は、自分の両親にとって、
何より、

娘にとって大切な日だったのに、と悔やまれてならない。

ノイの部屋のドアを開けると、泣き声が聞こえてきた。

ベッドにうつ伏せになって泣いているらしい。

「お婆様と一緒に選んだ」と誇らしげに言っていたドレスが小刻みに震えているのが見え、
少し前まで、それを着て嬉しそうだった娘の顔が思い出される。

フロースは、ノイがアデルの言ったことに怒ったのだと分かっていた。

それでも、やってしまったことの責任は、自分で負わねばならない。

フロースは娘の傍らに座り、その髪をなでる。
そして言った。

「お客様たちには、ママから謝っておいたわ。
テールクロスが絡まってしまったと言い訳したけれど、
お爺様とお婆様には謝った方がいいわね。
あなたの気持ちも分かるけれど、ここはラーウスとは違うの。
その事は何度もあなたに言ったでしょう」

ノイが顔を上げた。

フロースは、娘の髪を整え、涙をぬぐう。

ノイは後悔している。

きつと、「自分の人生はこれで終わりだ」ぐらいに思っているに違いない。

これから先、失敗はいくらでもあるのに、そんなことなど考えもしない。

自分に出来るのは、それを解決する方法を共に考えてやることだけ

なのだ。

「一人で誤りに行く？ それともママに付いてきてもらいたい？」

ノイは頭を振った。

フロースは、どっちなのだろうと思う。

「一人で行けるの？」

すると、ノイは口を開いた。

「ママ・・・あのね・・・えっとね・・・

どうしよう・・・わたし、モーリスに嫌われたかも・・・」

そして、フロースに抱きついて声を上げて泣く。

フロースは、ノイの涙はそのことだったかと思った。

そして娘の背中に手を回し、赤子をあやすように優しく叩く。

「泣いたらいいわ。

ママもパパに嫌われたと思って、泣いた事が何度もあったのよ」

ノイは顔を上げる。

「ママが？ パパを殴ったの？」

ノイが真剣な顔をして聞くので、
フロースは笑い出しそうになる。

ノイは成長したように見えても子供なのだ。

ノイの初めての恋。
恋をすると、涙を流すこともある。

フロースは、ノイの恋は叶うはずは無いと思っていたので、
自分とイベリスのことは、ノイとは違うのだけれど、
今まで、そんなことを話したことは無かったなと思った。

いい機会かもしれない。

「いいえ、そうじゃなくて・・・」

フロースはそう言って、話し始めた。

涙（後書き）

フロースとイベリスの恋物語は、長いので、ここでは割愛します。

もし、お読みになりたい方がいらっしゃれば、

「イベリス」

<http://ncode.syosetu.com/n3994v/>

へどうぞ。

この話のネタバレになるかもしれませんが、
読み終わる前に、この話の方が先に終わるでしょう。

また、読まなくても、この話に差し障りはありませんので、ご安心
ください。

居場所

フィニアスは、アデールにドレスを着替えるよう告げ、下がらせた。

散らばったものも、早々に片付けさせたので、茶会は落ち着きを取り戻し始める。

フロースは、娘の不注意でテーブルクロスが絡まったと言って謝った。

フィニアスも、自分の妻が、
ディフォーレスト子爵の娘である叔母を中傷したとは言えない。

人々は、アデールが言ったことの意味に気付いていなかった。

フロースの日焼けから、

彼女が楽な暮らし、つまり貴族がするような暮らしをしていないのは明らかで、

アデールが叔母の心配をするのは自然だ。

例えノイの怒りに気付いたとしても、

「母親と自分の日焼けを恥ずかしく思った」ぐらいの想像力しかない。

それより、『花のお茶会』に招待されている自分たちが、
変な噂をするわけにはいかなかった。

子爵との関係を失うことにもなるかもしれない、そんな危険を冒すつもりもない。

とにかく、何が起ったか分からない彼らにとって、ノイが誤ってテールをひっくり返したという言い訳は、受け入れやすいものだった。

モーリスだけはわざとなのを知っているらしく、「ノイには驚いた」と言ったのだけれど、皆と同じようにそれを受け入れた。

いつもなら、フィニアスは、それで終わりにしただろう。

ところが、そういうわけにもいかなさそうだ。

彼は、モーリスが次の公爵になるうがなるまいが気にしていなかった。

デュパール公爵は宮廷での影響力が少なく、若い後継者も自分の人脈すら作っていない。

誰かに利用されるとしても、ディフォーレスト子爵を敵に回すのは、頭が悪いとしか言い様がない。

そんな愚かなやつであれば、相手にする必要などない。

それなのに、なぜか彼は絡んでくるし、自分もほっとけないのだ。

「僕は、あなたに謝ろうと思っていました」
モーリスが言った。

「ノイに関心が無いと言ったのは嘘で、本当は彼女を気にしています。」

今日、ここへ来たのは、ディフォーレスト子爵の集まりだからですが、

ノイに会いたかったのも事実です。

ところが、今は戸惑っています。

男爵、あなたが懸念しているのは、彼女は、僕には激しすぎると言うことでしょうか」

「あんたがノイに惹かれたのは、あんたの中にも激しいものがあるからじゃないのかね」

モーリスは驚く。

「あの激しさはラーウス人のものだが、ダカンレギオン族も激しい民族だった。

あんたはそれに惹かれている。

これは余計なことかもしれないが、

あんたは、本当に公爵になりたいのかね？」

彼は黙っている。

「だから、『ゆっくり考えろ』と言ったんだ」

フィニアスは、そう言って去ろうとする。

「もう一つ、あなたに謝りたいことがあります」
モーリスが慌てて言った。

「その後、あなたのことを聞きました。」

あなたが『のうのうと生きてきた』と言つのは言いすぎでした。
あなたは僕より辛い思いをしたのに・・・」

フィニアスは、正面に向き直る。

「人が、どんな辛い思いをしてきたかを、他人と比べても仕方が無い。
い。」

問題は、それをどうするかだ。

あんたは、自分の道を行くことだな」

「僕が公爵になるのは決まっています」

「じゃあ、そのように生きてほしい。」

わたしは、あんたがそのことで悩んでいると思っただけだ」

モーリスは、深く息を吸った。

「公爵になれば、地位と豊かさを手に入れ、

自分のしたいことを自由に出来ると思っ たんです。

ところが実際は、

しきたりと組織化された生活に従って、ステイツを守ることに負
われ、

自由などありません」

「自由にならないのなら、公爵にならなければいい」

「これほどの地位を捨てるのは愚かなことです」

「愚かなのは、地位のために、自分を捨てることではないのかね」

モーリスは、しばらく、何も言えないでいた。

与えられた地位と豊かさを素直に喜べない自分がいる。

だからと言って退けられるほど強くもない。
他にやってみたいことはあるのだけれど、それも不確かで、
どこに自分の居場所があるのか、はつきりしないのだ。

フィニアスが再び去ろうとすると、モーリスは口を開いた。

「・・・僕は、優柔不断です。

自分でも分かっているんです。

僕の祖父は、故郷を離れる時、父親に言われたそうです。

『ダカンレギオン族が殺し合い、

自分が死ぬようなことになっても、戻って来てはいけない。

お前の道を生きる』とです。

祖父はそのように生き、父もそうでした。

それなのに僕は、父が早く死に、残された僕らの生活も楽ではな
く、

頼りにしていた祖父も亡くなり、不安でした。

そんな僕が公爵になれるのですよ。

僕は恵まれています」

「そこまで思っているのなら、それでいいじゃないか」

「恵まれていると分かっているのに、

これでいいのだろうかと思っでしまいます。

やりたいことはありません。

祖父の話から、民族学に興味を持っていました。

文化は興亡し、時には他文化に吸収され、それでも人は、したた
かに生き続けます」

「つまり、あんたは、人類が何なのかを知りたいんだ」

「問題は、それをやるのに時間と費用が掛かるということです。簡単に就職できる分野でもありません。

公爵になれば、それが出来ると思ったのに、そうではなかったんです」

「だからあんたは、集団で馬に乗って、くだらん憂さ晴らしをした」
「そうです。」

あなたの言う通りです。

それも、ノイに会うまででした。

あの子は、何と言うか・・・まっすぐなのです」

フィニアスは、厳しい顔をした。

こんな若者が、女の子に近づく理由を知っている。

「単なる興味だけなのなら、あの子に近付くんじゃない。

自分の欲求を満たしたいのなら、尻軽な女の所に行け」

モーリスは驚いて言った。

「僕は、そんなことなど考えていません」

「じゃあ、どうしようと言うんだ？

あんたは、自分のしたいことすら分らないのに。

気になった女の子の、ちよつと激しい所を見て、
すぐに慄くあんたに何が出来るんだ。

あの子をどうするつもりだ。

自分の空虚な気持ちを埋めてもらいたいのか？

ノイは純粋な子だ。

そんな子を利用するのはよせ。

今は激しくても成長する。

あの母親を見ればいい。

彼女が、ノイを育ててるんだ！」

そう言って、フィニアスは去っていった。

あるがまま

フィニアスは、アデルの部屋へ向かっており、その足を速める。彼は腹を立てていた。

それはモーリスではなく自分に対してで、彼の内にある葛藤が乗り移ったような気がしてならない。モーリスとは性格も環境も違うのに、どこか似ている。

彼は、公爵になるという話がなければ、自分の興味を趣味の域に留め、平凡な人生を歩んだだろう。ノイとは、同じ民族の血を引く者同士として、めぐり合えたかもしれない、そうしたら、普通に愛を育てられたかもしれない。

もし自分が、もっと早くフロースとめぐり会っていたら・・・

彼女がノイと同じ十六歳で、男爵家など失われてしまってもいい、父親が自殺などせず一緒に生活を建て直してくれていたなら、自分は、もっと素直でいられたかもしれない。

「尻軽な女の所へ行け」と非難がましく言いながら、そうしていたのは自分だ。そしてフロースに会っても、女は同じようなものだと思っていた。ところが、そうではなかったのだ。

フロースは、あるがままに生き、駆け引きなどしない。

忘れていた自分を思い出させてくれる。
それは心地よく爽やかで・・・

そんな取りとめも無いことを考える。

そして、妻の部屋の前まで来ると足を止めた。

もう過ぎてしまったことだ。

「もし」だなんて自分らしくない。
現実には、ここにあるのだから。

フィニアスはドアを開けた。

アデルは、着替えを終えるところだった。

袖のボタンを留めながら、その目に怒りの炎を忍ばせ、夫をちらりと見る。

「紅茶の染みで新しいドレスが台無しよ。
とんでもない娘だわ。」

ああ、なんて恥をかかされてしまったのかしら」

フィニアスは、それに答えなくて椅子に座った。

「きちんとしつけられてない子って駄目ね。

ニノンにも良い影響は無いんじゃないかしら。

わたしたちも、出来るだけ早くノートン城に戻った方がいいかもしれないわ。

そうそう、モーリスと一緒に乗馬をしましょうって。

あなたもいかが？

ネイサンも喜ぶと思うわ。

これからは、子供たちの為にも、同じレベルの人たちとお付き合いしましょうよ」

アデルは、しゃべり続けるのだけれど、

フィニアスが何も言わないので、苛立ちを募っていく。

「フロースにはがっかりしたわ。

昔の面影なんて無いし、あの叔母に似てると言われても迷惑な話よね」

「フロースがディフォーレスト家を離れた時、

あんたはニノンの年だったから、あまり覚えてないんじゃないのか？」

フィニアスが、初めて口を開いた。

アデルは最後のボタンをはめ終わると、フィニアスの方を向く。

「あなたは良く覚えているみたいね。

どう？

彼女はもう若くないわ。

あなたが、かつて愛した女性は、年を取った？」

それは、いやらしい言い方だった。

フィニアスは顔を上げた。

アデルが、いら立っている理由は分かっている。
嫉妬だ。

「フロースは、今でも同じフロースだ。

年と共に、その深みを増している。

あんたこそ、いい加減にフロースの真似をやめたらどうだ？」

「そのフロースに似ているわたしと結婚したのは誰かしら？」

フィニアスは一呼吸置き、それから彼女の方を見る。

「わたしが、そんなあんたに惹かれたのは事実だ。

だが、必要だったのは、プリオベール家の血を残すことで、

若くて健康な女性だったならそれで良かったんだ。

あんただって、フロースの真似をしてわたしに近付いたんじゃないか」

それは、お互いに知っていながら、今まで口にするのを避けてい

た。

アデルは野心家だ。

そこがフロースと違う。

フロースがいなくなった後、

彼女に似ていると言われたアデルは、彼女のように振舞って皆から可愛がられ、

そのようにして自分にも近付いてきた。

もちろんそれに気付いていたし、全てを含めて彼女を愛せたから結婚した。

とはいえ都合が良かったのも事実だ。

彼女は、ディフォーレスト家の娘でもあったからだ。

「自分も同じじゃないか」とフィニアスは思う。

自分も野心を抱いて、フロースを利用した。

そうして彼女を失ったのだ。

フロースのように、あるがままに生きるのとは、なんてほど遠いのだろう。

「わたしたちは似たもの同士だ。

自分の欲しいもののためには何でも利用する。

この結婚も、お互いの目的を達成するものではなかったのかね？」

フィニアスがそう言うと、アデルは、顔を真っ赤にして憤る。

彼女は、フィニアスを一目見た時から恋焦がれ、フロースの真似をしてでも彼に愛されたかったのだ。

「そのあなたが、

公爵になろうとするモーリスへの態度は違うんじゃないのかしら？
ノイを利用して、モーリスに取り入ることも考えたら？

そんなにフロースが大切なら、彼女と結婚すれば良かったのに。

彼女は、他所の人と結婚してしまったじゃない。

ラーウスなんて貧しい国のね！」

フィニアスは、アデルの腕を掴んだ。

アデルが嫉妬すればするほど、彼の心は離れていく。

「あんたが、こんなに愚かだとは思わなかった。

ラーウスが、どんな国なのか知りもしないくせに！」

アデルは、フィニアスの手を振り払うと反動で後ろへ下がった。
そして彼を見る。

「残念ね。フロースが、あなたを愛することは無いわ」

フィニアスは、うんざりしてしまった。

「好きにするんだな」

そして彼女に背を向ける。

「どこへ行くの!？」

「エスぺビオスに戻る。

あんたは、ここにいるなり、ノートン城に帰るなり、したいようにすればいい」

フィニアスは、それだけ言うと、勢い良くドアを閉めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5426z/>

フィニアス

2012年1月7日10時01分発行